



遙かなノートルダム
森 有正



筑摩書房

森 有正 もり ありまさ

1911年東京に生まれる

1938年東京大学仏文科卒業

東京大学助教授を経てパリ大学教授・国
際基督教大学教授

1976年10月死去

主著訳書

「パスカルの方法」「デカルトの人間像」

「デカルト研究」「近代日本とキリスト

教」「ドストエフスキー覚書」「バビロン

の流れのほとりにて」「旅の空の下で」

パスカル「田舎の友への手紙」

ブトルー「パスカル」

アラン「わが思索のあと」

リルケ「フィレンツェだより」



遙かなノートル・ダム

©森 有正 1967

昭和42年4月30日 初版第1刷発行

昭和52年12月10日 初版第26刷発行

著 者 森 有 正

発行者 井上達三

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

郵便番号 101-91

振替東京 6-4123 Tel (291)7651(代)

印刷・多田印刷 製本・和田製本



(分類) 1010 (製品) 84000 (出版社) 4604

遙かなノートル・ダム

辻邦生氏に
感謝をもって

目次

I

霧の朝

7

ひかりとノートル・ダム

38

遙かなノートル・ダム

74

II

赤いノートル・ダム

109

ある夏の日の感想

117

パリの生活の一面

133

ルオーについて

165

思索の源泉としての音楽

207

滞日雑感

218

あとがき

241

装幀 石岡瑛子

I

霧の朝

数年来、フランスでは氣候異変がたびたび言われる。昨年などは雨が例年より多かったかと思ふと、今年はまだ長い間晴天が続き、夏には所によつては水饑饉まで起る騒ぎであつた。地方などでは、かつてとだえたことのない泉水も涸れて、ぼたぼたと滴がたれるだけになつてしまつてゐるのを方々で見た。八月に入ると空模様が崩れはじめ、九月にはもう灰色の空がすき間なくパリの空を覆い、月末には暖房が恋しくなるのがつねであるのに、今年は十一月になつても、雲一つない快晴の日が多かつた。しかし、それでも、やつと数日前から、暗く寒い冬がにわかによつて来た。今朝、窓の鎧戸を開けると、冷たい身を切るような外の空氣が室内に流れ込み、ノートル・ダムも、サン・ルイ島も、はるか向うに見える市役所の黒い屋根も、灰色の空の下に灰色の霧に包まれ、大伽藍の外陣部の東側の小さい公園が、植えかえのため年を経た大マロニエのむれが抜きとられたあとを、人けもなく寒々と拡がつていた。水位のおちたセーヌは池の水のように動かず、ケー（岸壁）に沿う道路には、車も人影もまばらであつた。こういう日が毎日毎日続きは

じめると、人々は仕事と夜の燈火とにその憂鬱を晴らす本当にバリらしい生活が始まる。今年はそれが例年よりも大分遅れ、大学の新学年の開始と同時にやって来た。夏の光にひかれて外に向って激しく開かれていた感覚も静まり、心は内へ向う。とぎれていた反省と思索とが、しばらく忘れていたリズムを取りもどしながら、内面を流れはじめる。

こういう、まだ調子の出きらない、仕事の季節の手始めであるかのように以下にたどたどしく書くことは、反省とも感想ともつかないものである。いろいろの問題を論じたり、考えたりすることになると思うが、要点はその内容にはない。むしろ、その視点と態度の方が重要なこととして僕の心に映る。一つには外国にいるせいもあるであろう。しかしそうだとばかりは言い切れないものもあるのである。

僕がバリに来たのは、ちょうど十五年前、一九五〇年の九月の末であった。その頃は気候も順調だったのか、九月末というのが、今年のいまごろのような天候だった。マルセイユからの荷物がなかなかバリに着かず、外套なしの夏服で、寒さにふるえていたことを思い出す。それから十五年、世界の変化を考えるとほとんど隔世の感がある。そのころ、朝鮮半島では、戦火が燃え上っていた。船が寄港したサイゴンでは、ヴェトナムの解放戦がたけなわであった。僕自身、まだパスポートも持たず、占領軍の出国許可書を身につけているだけだった。

パリに着いて、十五年経った。一年のつもりで来たフランスに十五年いてしまった。それがよいことであつたか、わるいことであつたか、自分なりにずいぶん考えもしたし、自分なりの結論めいたものもないではないけれども、いずれにしても、この十五年を今日のために善用する以外には仕方がないと思つてゐる。

時は容赦なく過ぎて行く。日本も、フランスも、世界も変化した。自分も変化した。ただ僕はフランスにゐる。しかもフランス人ではない。日本人だ。そういう僕にとって、こういう内外の変化は、一種の予想しなかつた経験の構造を僕の中に露わにし始めた。それは、一言でいえば、自分の中に、経験の二重の層が出来、一つは自分を取り巻くフランスの社会の中で形成されるもの、もう一つは、その深部に、あるいは、その底部に、深層心理と呼べば呼べそうな、一種の夢の世界のようなものが形成され、それが遠距離にある日本の社会の変化に実に鋭敏な感度をもつて呼応しながら、連なつてゐる、ということである。だから僕は、遠い外国に長くいたからといって、外国人になつたわけでは決してなかつた。日本の変化は、何時でも、またその変化がいかに間隔を置いて入つて来るにしても、自分の国の変化であり、また自分の変化でもあつた。しかし、外国で形成されはじめた経験の層も、それが生きた層である以上は、年月が経つにつれて、それ自体深まり、自分の深部に根を拈げはじめ。それが自分の夢の層に喰ひ込みはじめる。自分の心のさらに奥にある、自分の生れた国の歴史と、外国の経験の層の奥にある、その外国の歴

史とが、異常な次元でからみ合い始めるのである。今はそのことについての反省を展開することは出来ないし、他の機会（おそらくは決して来ない機会）に譲らなければならない。ただ一つだけ言っておきたいことは、僕は、そういう心の構造の中に、自分にとって、自分の国と外国とが交渉する、本当の唯一つの実在する場所を確認したのである。少くとも僕にとって、それ以外のいかなる場所でなされる外国文化論議も、それと対応して考えられる日本文化論議も、色あせた、単なるおしゃべりとしか映らないのである。

こういう考え、あるいは反省が、一人よがりの独断として批判されやすいことは、僕はもちろん予期している。いったい何の権利があつて、どういう論拠があつて、僕は単なる反省ではなく、主張、あるいは自己主張に取られかねない言葉をもてあそぶのであろうか。僕は、確認、と書いた。もちろん、僕の確認であり、他の人の否認あるいは否定、ないしは批判を、原理的には、すこしも束縛するものではない。ただ、それを説明するとなると、事が厄介になつて来る。というのは、それをするには、僕の全経験をそこに持ち出すほかはないからである。言うまでもなくそれは不可能である。これは僕の経験に限らない。全体、僕の経験なぞを持ち出すのは、おこがましい限りなのである。それは経験そのものがそういう性質のものだからである。したがって、僕は、個人的な反省あるいは感想という形でものを書くのが一番妥当しているし、また無難だと

思っている。これは処世術というようなものではなく、事実、自分がどういう間違いをしているか自分ではなかなかわからないからである。専門の学術的論文ともなれば、趣を異にするのが当然である。学問は公開、批判、が本来の建前だからである。一々断わる必要がないからである。

ところで話を元に戻すと、変化と流動とが自分の内外で激しかったこの十五年の間に、僕のいろいろ学んだことの一つは、経験というものの重みであった。さらに立ち入って言うと感じから直接生れて来る経験の、自分にとっての、置き換え難い重み、ということである。

念のためつけ加えると、僕はここで別に経験論哲学を論じようというのではなく、また経験というものを学問的、論理的に定義しようというでもない。そうかといって、経験というものを、俗にいう経験を積んだ人、という場合の意味に解しているのでもない。このあとの意味では、経験というものは一つの手段の意味に、金を溜めるこつ、という場合のこつを心得る、という意味に近いものとなるが、そういう意味に解しているのでももちろんない。僕の言おうとする経験がこの二つの意味にも何かの点で触れることは否定できないが、そういう意味は、さしあたり関心の外にある。僕にとって大切なのは、妙な言い方をすると、経験がどういうものか、ということの経験である。

パリに着いてから僕は、多聞にもれず、フランス文化とか文学とか西欧文明の伝統とか、とり

とめもないことを考えながら、方々歩きまわっていた。名所旧跡も丹念に見て歩いた。それは、もちろん、僕を養ったには違いないが、それがどういう思いがけない道すじを通じて、僕を養っていたかには全然気のつくはずがなかった。過去に書いた二三の本を恐る恐る開けてみると（恐る恐るというのは、僕は自分の書いたものを読み直すのが怖いのである）、その状態が手に取るようによくわかる。しかしある時、さすがに鈍い僕にも、いささか悟る機会が来た。それはまったく思いがけない仕方で起った。思いがけない仕方、というのは、僕のそれまでの行動の仕方が全然逆だったという自覚と表裏一体になってそれが起ったからである。

どこだったか、今ではすっかり忘れてしまったが、どこかフランス以外のところで、あるいはイタリアだったかも知れない、僕はある女体の彫像を見ていた。その作品はいくら見ても倦まないほど僕を牽きつけた。僕は何度もそのまわりをまわった。僕には、その彫像の美しさに牽かれると共に、その牽かれる根拠のつかめない焦燥の念があった。それで何度もそのまわりをぐるぐるまわり、終いに疲れてしまって、部屋の隅にあった椅子に腰を下ろした。その瞬間に僕は、自分が同じような経験を何度もしたことを思い出した。それは、ある時はカテドラルであった。ある時は一個の彫刻、ある時は一枚の絵であった。明るい太陽をうけて真白に輝くシャルトルの大伽藍、鳩の群がる外陣部の方から斜めに見える実に密度の高い、しかも均整のとれたパリのノートル・ダムのうしろ姿、モンパルナスのアトリエにあるひなびてしかも高貴なブルデルのサ

ント・バルブ、ルーヴルにあるアヴィニオンのピエタ、その他、数かぎりない同じような経験がにわかによみがえって来た。

そこには一つの共通した事態があった。限りなく牽かれながら、その牽かれる根拠が深くかくされている、というその事態であった。その瞬間に僕は、自分なりに、美というものの一つの定義に到達したことを理解した。それは、僕にとって、人間の根源的な姿の一つであった。それはそれで一つの理解ではあるうが、僕にとって一番大切だったのは、そういう数限りのない作品が、一つ、一つ、美の定義そのものを構成しているのだ、という驚くべき事態であった。換言すれば、一つ一つの作品が、「美」という人間が古来伝承してきた「ことば」に対する究極の定義を構成しているという事実だった。作品はもうこれ以上説明する余地のないぎりぎりの姿でそこに立っているだけだ。僕がそれに限りなく牽かれるという現実がある以上、僕が作品を把握するのではなく、作品の方が僕を把握しているのだ。事態がそうである以上、僕の方がその根拠を把握するという可能性はまったくなくことになる。古代の人はこういう事態に美、アイデア、フォルムなどの名を命じたに相違ない。

経験が名辞の定義を構成する……。これは経験という言葉の含蓄する意味の一部かも知れないが、またその本質的な部分であるに相違ない。

このことを反省したとき、僕には言葉というものが限らない重みをもつものとして現われてく

るようになった。言葉が重い、というのは、直接に言葉自体が重いというのではない。それが無数の定義によって荷なわれ、しかも一つ言葉であるからである。その上に、それは言葉はすでに存在し、人間の営みはその周りに集合し、それを無限のニュアンスの内に定義しながら、その一つ同じ言葉で命名されるという事態である。これは、また、伝統、あるいは継承ということの深い意味をも解明することになるであろう。また進歩ということの深い意味もそれに関連して出て来るであろう。

僕はよくルーヴルに行く。一人で行くこともあるし、他の人といっしょのこともある。ある時はギリシアの彫刻だけゆっくり見て出て来ることもあるし、全体を一めぐり通観することもある。年を経るにつれて、全体に深さの差が、抗いようもなく、くっきりと出来て来る。ある時はこの事を感じるだけのために出かけて行く。それは定義することの深さの差である。

以上述べたことは美に関しているが、この問題は人間の他の働きの場にも拡大して行くように思う。否、すでに美そのものの中でも、問題は無限に分化して行くであろう。ただその要点をなす、言葉とその定義、の關係は不断に維持されるであろう。